現代のことば

ジョン・ブリーン

本をやっと書き終えた。肩の荷が下りた。表題は『神都物語・伊勢の近現代史』。母語でない言葉で書くのは大変だが、調査は実に面白かった。

伊勢神宮に何度も足を運んだが、先月は千年以上の伝統をもつ遷御儀礼の一つに参列してきた。伊勢は儀礼の場であって、多くの儀礼の中でも祭神が引っ越す遷御儀礼が最重要である。遷御に参列しないことには伊勢を語る資格がない、と言ってもよい。

表題にある「神都」は伊勢が明治20年代後期から用いだした地名のブランドネームである。明治期の伊勢はどうやら京都に対し強いライバル意識があったようで、明治28年に京都で開催された平安遷都千百年記念祭に刺激され、神都としての自己像を確立していく。

伊勢は桓武天皇が創建した

京都の中の伊勢

京都をはるかに凌ぐ神の都だ、という響きを「神都」はもつ。当時の伊勢はまだ宇治山田という町にすぎなかったが。歴史的に見れば京都と伊勢との関係史が複雑で興味深い。

歴代天皇は8世紀の平安遷都以来、伊勢の天照大神を京都御所の内侍所で祀っていた。しかし天皇は不思議にも伊勢を参拝しない。そのかわり古代から中世まで未婚の皇女を伊勢地方に派遣し、斎王（一種の巫女）として天照大神に仕えさせた。斎王は京都の野宮神社で身を清めてから伊勢に向かう慣わしであった。ちなみに天皇による史上初の伊勢参拝は維新直後の明治2年である。

京都と伊勢の関係史を考える時、中世は特に重大である。1489年に吉田神社宮司の吉田兼倶は天照大神が光り輝きながら吉田山に飛来してきたと、時の天皇に告げる。兼倶は、飛来を信じきった天皇から許可を得て、吉田山に内宮と外宮を打ち立て、伊勢の神々を祀る。吉田山の大元宮の一画に内宮と外宮は今日にもある。

京都の上京区、中京区、下京区には神明町がある。そして高松神明、朝日神明、粟田口の神明、宇治の神明等のように神明社もあちこちに点在している。神明は、ほかでもない伊勢の祭神天照大神をさす名称である。これらの神社も中世に創建され、近世まで繁盛していたが、その存在は京都と伊勢の親密な関係を物語ってくれる。

京都が神宮の創建神話に織り込まれたのも中世である。鎮座に相応しい地を探し求める天照大神は吉佐宮に立ち寄った伝説は中世にできた。吉佐宮は宮津市の籠神社だという説があるが、この籠神社は確かに中世に伊勢の神々を祭り、近世以降自らが「元伊勢」を名乗りだす。

拙著『神都物語』で取り上げる近現代の伊勢は、京都が深く関わった中世・近世を否定した存在でもある。天皇は内侍所の天照大神とともに京都をさり、東京に向かう。上述のライバル意識は続くが、伊勢は京都との特殊的、前近代的関係を打ち切る。19世紀以降の伊勢神宮は大きく改革され、京都と全く新たな関係を築いていく。その関係の形成については拙著をぜひ参照されたい。

（国際日本文化研究センター教授・日本史）

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

© 京都新聞社 無断複製・転載を禁じます